

弓立社編集部編



137 ●

「ジェンダーだけをモチーフにして、社会学の入門書を書いてみよう。」——著者を代表して江原由美子さんは、こんなふうのべているが、その思いは半ば以上達せられていると言えよう。

ジェンダーとは「生物学的な性別……と区別された、社会—文化的性別」のこと。なおかつ「ジェンダーの社会学」は、女性の視点にこだわるフェミニズムと一線を画す。(本当は、男性も女性も同じくらいジェンダーに「囚われて」いる)のだから。本書は男女を問わず、自分の足もとから社会と人生を見つめ直すための、格好の水先案内だ。

さて、江原さんはじめ六人の執筆者が分担するのは、日常生活／政治社会／家族／労働／世界社会／感性リアリティ、の各章。社会学を学び始めたばかりの若い学生諸君が、自分の経験の範囲内で無理なく理解できるテ

マを、ゆったりとカヴァーしている。文章の語り口も、著者からの個人的メッセージとして、読者に届くよう配慮してある。

この本で出色なのは、これまでの常識をくつがえし、知識は知識にすぎないと、コラムに追いやってしまったことだ。そうしたコラムや、キーワード、研究ノートといった囲み記事だけ拾い読みしても、ちゃんといまの社会学の輪郭が掴めるようになっていく。そのかわりに本文では、社会学の考え方(リーズニング)を分かりやすく噛んで含めるように紹介してある。それも、集中力の限度を越えないように、数ページずつのブロックに区切って。参考文献、図表のあげ方も神経が行きとどいてるうえに、柴門ふみさんのイラストが、若々しい感覚を随所にちりばめて、ページを練るのがなおのこと楽しい。

——という狙い線が、手にとるようになっている、それに共鳴した。実際の出来ばえを率直に言うと、各章ごとにばらつきがあり、全体の調整も必ずしもうまく行っていないが、だいたい改善の余地がありそうである。まだ工事中、ということだろう。

だが、それはそれとして、著者たちの挑戦の意気どみは、やはり読者にもひしひしと伝わるはずだ。特に冒頭の数十ページは、映像的な手法が成功して、作品としても優れており一気に読ませる。本書がきっかけとなって

1989-17 1/1

こんな教科書ほしかった!

●橋爪大三郎

「週刊読書人」8月14日号

「こんな教科書ほしかった!」
 ひからびた社会学にうんざりの、全国の学生諸君お待ちかねのテキストの、ついに登場だ。快挙である。これを読めなかった私の学生時代が口惜しい。

●136

社会学を見直す人びとの輪が広がり、やがて中級の読物、一線の研究書へと、手が伸びていってくれればいなあと、楽しい夢をみたくなる。

というわけで、教科書として今のところ、本書は他の追随を許さないが、これ一冊ですむかという問題もある。テーマや切り口の点で、社会学全体からみてバランスを欠いているのは確かだ。それが気になる人もいるだろう

●138

が、総花的に何でも取り上げ、著者の顔が見えないこれまでの教科書にくらべれば、断然こちらをとるのが正しい、と思う。ただ、本書を補ういみでも、別な方向へのかたよりをもった教科書が、真似でもいいからあと何冊か出てほしいのだが。

(はしづめ だいさぶろう・東京工業大学助教授)

『ジェンダーの社会学』

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘
 天木志保美・安川一・伊藤るり著

〔新曜社・2400円〕

「社会学入門でもあり、読物としても面白い本。普通のごくささいな日常生活から、社会とは世界とは何かを考えられたら、きつともっと社会学が面白くなるだろう。……二転三転した議論の末、私たちは大冒険に乗り出し